

聖徳太子登場前夜のヤマト朝廷

塚口義信

香芝市をはじめとする葛城北部の地域は、日本史のスーパー・スターともいうべき聖徳太子(五七四―六二二)と、因縁浅からぬ関係をもっていました。西暦七二〇年に完成したわが国最古の勅撰の正史である『日本書紀』によると、推古天皇二十一年(六三三)年十二月、聖徳太子は王寺町西部から香芝市北西部にかけて連なる「片岡山」で、真人(仙人)に出会ったといっています。

また、聖徳太子の伝記集のひとつである『上宮聖徳法王帝説』(平安時代中期の成立)や『聖徳太子平氏伝難勘文』所引の「上宮記」などの史料によると、聖徳太子には「片岡女王(片岡王)」なる子どもがいたと伝えられています。

さらに香芝市をはじめとする葛城北部の片岡の地域には、いわゆる「太子道」「太子葬送の道」とも、「太子を偲ぶ道」ともいわれています(が通っています)。そこで今回は、「聖徳太子」を取り上げてみることにしました。ただ、聖徳太子についてはさまざまな問題がありますので、

本号では、太子が政界で活躍する直前の時代の政権抗争に焦点をしぼり、若干の考察を加えてみました。

はじめに

六世紀代の政界は、従来、蘇我氏対皇室(天皇家)という図式で捉えられてきました。崇峻天皇(？―五九二年)の暗殺まで実行した蘇我氏に対し、皇室側は天皇家の権威と権力の回復を企図して、推古女帝(在位五九二―六一八年)を擁立するとともに、聖徳太子を皇太子に任じて政務を総覧させた、といった考え方もあります。こうした考え方は戦前からあり、現在でもなお、有力な学説のひとつとして定着しています。また特に太平洋戦争終結以前は、天皇「現人神(人間)の姿を借りて、この世に現れた神」の時代でありましたから、蘇我氏の本宗(本家)は天皇を弑逆した極悪非道の一族として認識されていました。

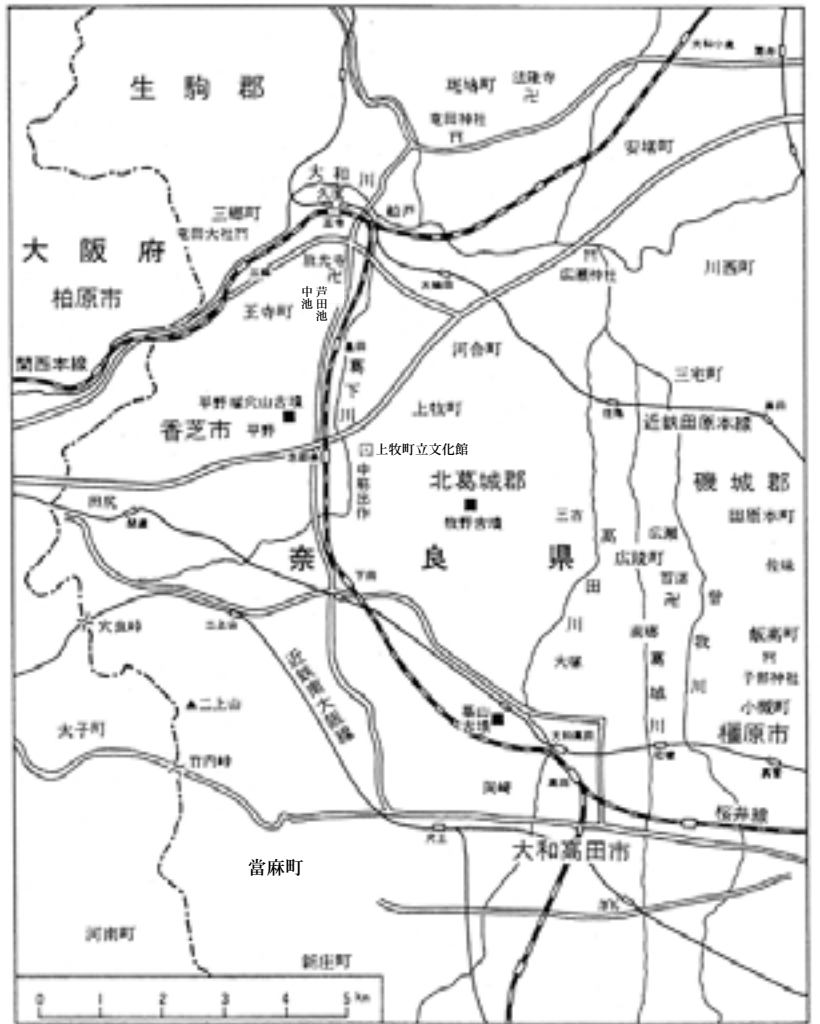
しかし、戦後になって、違った考え方も生まれてきました。実は推古女帝は蘇我馬子と同じグループに属し、聖徳太子と対立関係にあったのではないかと、といった考え方もあります。また、このほかにも、さまざまな見方が提起されています。しかし、蘇我氏・推古女帝・聖徳太子を主役とし、物部氏・中臣氏を脇役として歴史が叙述されていることだけは戦前から一貫しており、ほとんどの仮説はこのワクをこえたことがありません。けれども、こうしたワクで捉えられている限り、六、七世紀の歴史を正しく理解することはできないと思います。なぜなら、こうした見解はいずれも、『古事記』『日本書紀』のなかから都合のよい記事だけを取り出し、それを先人主に基づくそれぞれの仮説に当てはめているにすぎないように思われるからです。



太子道顕彰碑(上下とも)

敏達天皇の最初の皇后は、広姫という人でした。『日本書紀』敏達天皇四年（五七五）正月九日の条に、息長真手王の娘の広姫を立てて皇后とした、とはつきり書かれています。しかし、広姫はその年の十一月に亡くなってしまう。それで、そのあとを受けて豊御食炊屋姫尊、すなわちのちの推古女帝が皇后になったのです。

また、敏達天皇と広姫との間には、押坂彦人大兄皇子という皇子が生まれています。この皇子は、名前のなかに、有力な皇位継承候補者に付けられる「大兄」の称をもっています。さらに、この皇子は、『日本書紀』用明天皇二年（五八七）夏四月の条によると、用明朝の「太子」になって



「忍坂王家」関係地図

いました。

押坂彦人大兄皇子の子どもの田村皇子は、のちに舒明天皇として即位します。舒明天皇は、姪の宝皇女（のちの皇極女帝）と結婚し、そこに生まれたのが、天智・天武の兄弟です。したがって天智・天武両天皇の血統をさかのぼっていくと、舒明・皇極・茅渟王・押坂彦人大兄皇子・糠手姫皇女・敏達・広姫といった人たちの名前が登場し、これを系図で示すと、「天皇家・蘇我氏関係系図」の左半分のような一大系図ができて上がります。

さらに、押坂彦人大兄皇子は、のちに「皇祖大兄」と呼ばれて、非常に尊ばれた人でした。同

様に、舒明天皇の母の糠手姫皇女は「嶋皇祖母命」、茅渟王の妻の吉備姫王は「吉備嶋皇祖母命」、皇極女帝は「皇祖母尊」という尊称でもって呼ばれています。しかも、このような尊称もっているのは押坂彦人大兄皇子系の王族たちだけなのです。

それと、いまひとつ重要なことは、押坂彦人大兄皇子系の王族たちが、蘇我氏とほとんど血縁関係をもっていなかったことです。したがって血統からみると、六、七世紀代の王族たちは、大きく二つの系統に分けることができるのです。

■蘇我系と、非蘇我系です。

ところで、蘇我氏という豪族は、葛城氏や藤原氏と同じように、天皇家の外戚として繁栄を築こうとしていた豪族です。蘇我系の女性を天皇の妃に入れ、そこにできた子どもを天皇として即位させる、という方法をとっていました。したがって、蘇我氏の血をほとんど引いていない王族たち、つまり押坂彦人大兄皇子系の王族たちは、蘇我氏にとって、目のうへのタンコブとでもいうべきような存在であったと考えられます。このようにみえてくると、当時の政治史は、蘇我系の王族たちを中心と考えられるのではなく、蘇我系対非蘇我系の王族たちという図式のなかで捉えられなければならないということが、お分かりいただけるのではないかと思います。

この、非蘇我系の核となっていたと考えられる押坂彦人大兄皇子系の王族たちは、その名が示しているように、大和の忍坂（奈良県桜井市忍坂）に拠点をもっていました。したがって私は、敏達天皇系王族のなかでも、とくにこの系統の王族たちを「忍坂王家」と仮称しています。

しかし、忍坂王家は、大和の忍坂だけではなく、現在の奈良県北葛城郡広陵町から香芝市にかけての地域にも拠点をもっていました。敏達天皇はその元年（五七二）四月、広陵町の百済に百済大井宮という宮を営みましたが、この地はその後、子どもを押坂彦人大兄皇子を経て、さらに孫の舒明天皇へと伝領されていきました。彦人大兄皇子がこの地に水派宮を構え、また舒明天皇が百済宮を営んだのも、そうした因縁によるものです。また、彦人大兄皇子の子息の茅渟王は「百済王」（『新撰姓氏録』）とも呼ばれていましたが、これも、百済に所在した水派宮で、父とともに暮らしていたことにちなむ命名と考えると誤りありません。

さらに、『延喜式』（九二七年成立）によると、押坂彦人大兄皇子の墓は「成相墓」と称され、広瀬郡（広陵町）に営まれたと伝えられています。現在、広陵町には国の史跡に指定されている牧野古墳（円墳・径約六〇メートル）という古墳があり、研究者の多くは、これが彦人大兄皇子の奥津城（墓）ではないかと考えています。同じく『延喜式』によると、茅渟王の奥津城は「片岡葦田墓」と称され、葛下郡に所在すると記されていますが、この墓が香芝市平野に営まれている平野塚穴山古墳にほかならないことについては、本誌第七、八号で述べたとおりです。

蘇我氏の外戚政策と “忍坂王家”

以上のことを念頭に置いて、『日本書紀』を読み返してみましよう。もう一度、「天皇家・蘇我氏関係系図」をご覧ください。

六世紀の初頭、仁徳天皇系の王統が武烈天皇に至つて断絶し、新たに畿外北方より応神天皇五世の孫と伝えられる継体天皇が擁立され、即位します。この天皇は、近江（滋賀県）・越前（福井県の一部）・尾張（愛知県の一部）・南山城（京都府南部）・北河内（大阪府北部）・摂津（大阪府の一部）と兵庫県の一部などを基盤とした豪族―尾張氏や息長氏、茨田氏など―の支援を受けて即位した天皇です。中央豪族のなかには彼の即位を快く思わなかった一派があったようで、そのため、継体天皇はなかなか大和に入らず、周辺各地を転々としています。しかし、やがて両者の妥協が成立し、それまで王権を保持していた仁徳天皇系王統最後の天皇である武烈天皇の姉の手白香皇女と入り婿の私たちで結婚することによって、継体天皇は正式に大王位を継承し、大和に迎え入れられることになったと考えられます。

継体天皇のあとは、『古事記』『日本書紀』によるとその子どもたちが相次いで即位し、安閑・宣化・欽明の各天皇となつていますが、安閑・宣化両天皇のお母さんは目子媛といい、尾張の豪族の娘です。一方、欽明天皇は手白香皇女の子どもです。そうすると、安閑・宣化両天皇の背後には継体天皇を支援していた豪族たちが、また、欽明天皇の背後にはかつて仁徳天皇系王統

を支えていた豪族たちが、それぞれ控えていたと考えられます。

蘇我氏は、堅塩媛と小姉君がともに欽明天皇の妃となつていることから知られるように、欽明天皇を擁立していた豪族であり、このころから、外戚政策を展開します。といっても、このころの蘇我氏にはまだ王権を左右するほどの力はなく、欽明天皇が亡くなったあとは、非蘇我系の敏達天皇が即位し、前述したように、息長真手王の娘の広姫が皇后となつています。この広姫もまた敏達天皇と同じく非蘇我系の王族で、その出身地はかつて継体天皇の勢力下にあった近江国坂田郡の息長（滋賀県坂田郡近江町付近）です。したがって、欽明・敏達朝にはまだ、蘇我氏は専権を確立してはなかつたのです。

このように考えていきますと、欽明天皇の崩御後、敏達天皇を擁立した勢力とは、息長氏や尾張氏をはじめとする、かつて継体天皇を支援していた勢力そのものであつて、敏達天皇はこの勢力を、安閑天皇―宣化天皇―石姫を通じて受け継いでいたことが分かります。

敏達天皇のあとは、蘇我系の用明天皇が即位します。これは蘇我氏の外戚政策が成功したことを意味し、ここに至つてはじめて蘇我氏は大和の専権時代として発言できる権利を得たのです。しかし、だからといって、この時代を「蘇我氏の専権時代」とみることは正しくありません。なぜなら、なるほど天皇になったのは蘇我系の皇子ですが、「太子」には非蘇我系の押坂彦人大兄皇子が選ばれているからです。天皇が用明で、太子が彦人大兄皇子、この組み合わせは、かなり政治的で、妥協の産物以外の何も

のでもありません。

ところが用明天皇のあとには太子であった彦人大兄皇子ではなくて、蘇我系の崇峻天皇が即位し、ついで推古文帝が即位します。彼らの即位の事情は、まことに複雑なものでした。ただ、物部大連家が滅ぼされたのは用明天皇が亡くなった直後のことですから、用明朝前後の政治情勢だけは、どうしてもここで述べておかなければなりません。そこでまず、用明天皇崩御時における皇位継承候補者の問題から考えてみたいと思います。

用明朝前後の政権抗争

用明天皇崩御時における最有力皇位継承候補者として、第一にその名を挙げねばならないのは、押坂彦人大兄皇子です。先述したように、この皇子は名前のなかに「大兄」の称をもっていますし、何よりも、用明朝の「太子」であった人ですから。しかし、蘇我馬子が、蘇我氏の血を引いているこの皇子を推すはずがありません。というより、即位されては困るのです。では蘇我系の皇子のなかで、最も有利な立場にあったのはだれでしょうか。

それは用明天皇の義理の弟にあたる穴穂部皇子です。なぜなら、当時は天皇の兄弟が有力な皇位継承権をもっていたからです。だが、馬子にあってはこの皇子を擁立することについては、ちよつと具合の悪いことがありました。それはこの皇子の背後に、排仏派のリーダーの物部守屋大連が控えていたことです。史料①の『日本書紀』用明天皇元年(五八六)夏五月の条の記事

をご覧ください。

この記事のなかで注目していただきたいのは、物部守屋大連が穴穂部皇子と一緒に行動していることと、この事件によつて、炊屋姫皇(后)の推古文帝(と馬子)宿禰がともに穴穂部皇子を恨むようになった、とされることです。

以上述べたところによつて、当時、蘇我系グループ(炊屋姫・馬子派)と非蘇我系グループ(彦人大兄皇子派)のほかに、蘇我系の皇子である穴穂部皇子を推す物部守屋系のグループが存在していたことが分かります。物部・中臣の両氏は、穴穂部皇子を天皇に仕立てて権力を握ろうと考えていたわけです。そしてこの物部系のグループは排仏の立場をとり、崇仏の立場をとる蘇我系グループと宗教的に対立していました。

史料②の『日本書紀』用明天皇二年(五八七)夏四月の条の記事をご覧ください。

物部氏も中臣氏も神祇をつかさどる家柄の氏族ですから、新しい外来の宗教を天皇が受け入れることに反対するのは当然のことです。これに対して、馬子は仏教を受け入れることに賛成で、詔に従うべきことを主張します。ところが、このとき、穴穂部皇子が僧侶を従えて、内裏に入つていきます。この穴穂部皇子の行為は崇仏派つまり馬子派に接近することを試みた、と理解してよいでしょう。これに対して守屋は横目でにらみつけ、大いに怒ったといえます。

すると、押坂部史毛屎が急いでやつてきて、群臣があなただをおとしいれようとして、守屋に耳打ちをします。毛屎は押坂彦人大兄皇子の臣下ですから、この記事によつて当時、守屋は彦人大兄皇子派とかなり親密な関係にあつ

たことが分かります。

なお、毛屎と守屋とのこのような親密な関係は、大阪府八尾市の地が媒介となつて生じたのではないかと私は考えています。毛屎は彦人大兄皇子の経済的基盤となつていた押坂部(刑部)の管轄者ですが、その刑部が八尾市内にも置かれていました。河内国若江郡刑部郷(和名類聚鈔)がそれで、現在の八尾市刑部に当たります。一方、守屋は、洪川の家や、阿都の別業(別邸)を営んでいましたが、これも八尾市内です。前者は八尾市洪川、後者は八尾市跡部に営まれていたと考えられます。そうすると、これらはいずれも指呼の距離にありますから、毛屎はふだんから守屋の一族と親しくお付き合いする機会があつたのではないのでしょうか。

さて、一方、守屋派の中臣勝海は大連を助けようとして、「太子彦人皇子の像と竹田皇子の像」を作つて呪い殺そうとしますが、「事の濟り難からむことを知りて」(事の成功しがたいことをさと)り、彦人大兄皇子側に帰順してしまいます。彦人大兄皇子が呪詛されたのは、いつまでもなく、彼が非蘇我系の忍坂王家のグループによつて擁立されていた当時における最も有力な皇位継承候補者であつたからです。ではなぜ竹田皇子まで呪い殺されようとしたのでしょうか。当時、彼はまだ十四、五歳前後の少年であつたと思われ、政界の重職にあつたとはとても考えられません。にもかかわらず、呪詛されているということは、彼もまた有力な皇位継承候補者であつたからでしょう。おそらく彼のバックには、彼をこよなく愛した母親の炊屋姫や馬子が控えていたと考えられます。

それでは、なにゆえ、中臣勝海は彦人大兄皇子側に帰順してしまったのでしょうか。それはおそらく、穴穂部皇子が守屋を見限つて崇仏派(馬子派)に接近したことと関係があり、リーダーの守屋が穴穂部皇子を捨て、彦人大兄皇子擁立派に回つたからではないでしょうか。彦人大兄皇子の臣下の毛屎が守屋に耳打ちしたという先ほどの記事が、その証左となります。

また、『日本書紀』崇峻天皇即位前の条に、いわゆる蘇我・物部戦争に敗れた守屋の軍兵が早衣(黒衣)を着け、広瀬の勾原で狩獵するふりをして逃げ散つた、という記事がありますが、この広瀬の勾原とは大和国広瀬郡下勾郷付近、つまり現在の奈良県北葛城郡河合町もしくは広陵町付近に当たります。ところが、この付近は、押坂彦人大兄皇子の勢力下におかれていたところです。ここに守屋の軍兵が逃げてきたというのは、何を意味しているのでしょうか。彦人大兄皇子派の支援を求めて逃げてきたのでしょうか。真相はよく分かりませんが、ともかく、この記事は守屋が彦人大兄皇子派と近い関係にあったことを示唆しています。

しかし、蘇我系のグループにしてみると、物部氏や中臣氏にまで彦人大兄皇子擁立派に回られては、たいへん困ります。というより、外戚として繁栄を築こうとしていた蘇我氏にとっては、一大危機がおとずれたといわねばなりません。

蘇我系のグループに属する聖徳太子の舎人(天皇・皇族に近侍し、護衛等を任務としていた人の迹見赤檮(史料2の口語訳では「彦人皇子の舎人」とされていますが、これは誤りで、聖徳太子の舎人と考えるべきです)が、彦人大兄皇子の

もとから退出してきた中臣勝海連を殺してしまつたというのも、しごく当然のことであつたのです。なお、『聖徳太子伝暦』(九一七年成立)という書物によると、この舎人を差し向けたのは蘇我馬子であつたとされていますが、馬子はこの派のリーダーであつたわけですから、可能性としては大いにあり得ることだと思えます。

それはともかく、中臣勝海がいなくなつても、まだリーダーの物部守屋が残っています。そこで馬子は、泊瀬部皇子(のちの崇峻天皇・竹田皇子・厩戸皇子(聖徳太子)などの諸皇子や群臣に呼びかけ、五八七年七月、物部守屋の一族を攻め滅ぼしてしまいます。これによつて、忍坂王家のグループも政治の第一線から退かざるを得なくなり、蘇我閥の崇峻・推古朝には、ほとんどその姿すら現すことができなくなつてしまつたのです。しかしながら、推古天皇が逝去すると、彦人大兄皇子の子どもの田村皇子が舒明天皇として即位し、ふたたび忍坂王家の時代が到来することは、はじめにも述べたとおりです。

なお、彦人大兄皇子はいわゆる蘇我・物部戦争のときに、馬子側の軍兵によつて殺害されてしまつたのではないかとする説があり、学界でも有力視されていますが、私はそうではないと考えています。私はいくつかの根拠から、彦人大兄皇子は推古女帝即位後もなお健在であつた、と理解しています。この問題については、拙著『ヤマト王権の謎をとく』を参照していただければ幸いです。



聖徳太子絵伝一巻・鎌倉時代(上宮寺蔵/茨城県那珂郡那珂町)



法隆寺西院伽藍

むすび

今まで六世紀代後半の政治史は、蘇我氏と物部氏を中心に考えられてきました。しかし、そういう考え方は、そろそろ修正されるべき段階にきているのではないかと思います。私の考えでは、当時の王族は大きく分けて、「蘇我系」と「非蘇我系」とでもいうべき二つの系統があり、後者は比較的まとまってひとつの政治勢力となっていたようですが、前者には対立する二つの派がありました。ひとつは蘇我馬子・炊屋姫を中心とした派であり、他のひとつは物部・中臣両氏を中心とした派で、この派ははじめ蘇我系（小姉君系）の穴穂部皇子を支援していました。のちに穴穂部皇子の裏切りによって押坂彦人大兄皇子擁立派に回りました。

これら三つのグループはたがいに勢力を伸張するため、それぞれ皇位継承候補者を立てて対立し、三つどもえの抗争を展開しましたが、そこに仏教受容の可否をめぐる問題が重なって、その対立・抗争は複雑な様相を呈しました。したがって、一見、仏教をめぐる戦争であるかのように見える、いわゆる蘇我・物部戦争も、実はその本質は皇位継承をめぐる戦争であった、というのが、歴史の実相により近いと思われまます。

（堺女子短期大学学長・文学博士）

主要参考文献

- 井上光貞『日本古代国家の研究』岩波書店 一九六五年
- 家永三郎『日本仏教史』古代篇 法蔵館 一九六九年
- 上田正昭『女帝』講談社（現代新書）一九七一年
- 井上光貞『飛鳥の朝廷』（日本の歴史 第三卷）小学館 一九七四年
- 山尾幸久『日本国家の形成』岩波書店 一九七七年
- 直木孝次郎『大兄制と皇位継承法』（『セミナール日本古代史』下、所収）光文社 一九八〇年
- 蘭田香融『日本古代財政史の研究』塙書房 一九八一年
- 鈴木靖民『増補 古代国家史研究の歩み』新人物往来社 一九八三年
- 田中嗣人『聖徳太子信仰の成立』吉川弘文館 一九八三年
- 塚口義信『女帝の出現』（『関西の風土と歴史』所収）山川出版社 一九八四年
- 荒木敏夫『日本古代の皇太子』吉川弘文館 一九八五年
- 坂本太郎『古代の日本』（坂本太郎著作集第一卷）吉川弘文館 一九八五年
- 黛弘道・武光誠編『聖徳太子事典』新人物往来社 一九九一年
- 黛弘道編『古代を考える 蘇我氏と古代国家』吉川弘文館 一九九一年
- 塚口義信『崇峻天皇の暗殺と推古女帝の即位』（『研究報告集』第三〇集）大阪私立短期大学協会 一九九三年
- 塚口義信『ヤマト王権の謎をとく』学生社 一九九三年
- 黛弘道監修『古代史の謎』実業之日本社 一九九七年
- 水谷千秋『継体天皇と古代の王権』和泉書院 一九九九年